

日本で出版された北宏二／金龍煥の作品調査報告

牛田 あや美

はじめに

二〇一七年、学内の助成金をもとに、同年九月五日の韓国国立中央図書館から調査を始めた。その後、二〇一九年度から科研費の助成を受けた「日本統治下の漫画家・北宏二／金龍煥の懸隔」から本格的に調査をすることとなった。本稿は韓国における最終調査日の二〇二〇年二月三日、日本における最終調査日二〇二一年二月二十五日までの調査記録である。

北宏二こと金龍煥は日本、朝鮮、韓国で活躍した挿絵家・漫画・マンガ家である。彼は一九一二年、日本統治下の朝鮮の釜山近く、現在の金海市の大きな果樹園の息子として生まれた。高等教育を受けたのち、現在の東京芸術大学の進学を夢見、一九二九年に日本へと来た。川端画学校で学んだあと、当時新しく創立された帝国美術大学へ入学した。このころから『日本少年』『少年俱樂部』等の人気雑誌に北宏二の筆名でペン画挿絵を描き活躍した。終戦後、朝鮮で初めての職業マンガ家として新聞・雑誌の発刊に尽力する。一九五九年、アメリカ軍の要請により日本に戻り、再度日本で活躍をし、一九九八年アメリカで亡くなっている。

韓国では漫画・マンガの父として知られているが、日本での彼の活躍は「ペーブル」に包まれている。時代を経、忘れ去られてしまったことは否めないが、日本での活躍した時代が、彼の業績を隠すこととなっている。本研究の調査は彼の「謎」の部分である戦前の日本での挿絵家・漫画家・マンガ家としての作品調査である。本稿では、彼の作品をクロニカルに見渡した際、目立って仕事をしていた戦前の雑誌や新聞を中心とした。本稿の後、日本で出版された北宏二／金龍煥の作品を最後に一覧として添付した。今回は、彼が新聞『統一日報』での顧問であった時期、同新聞での風刺漫画や四コマ漫画・マンガは調査中のため省いた。

彼の挿絵、マンガなどの調査を行った場所は、日本では国会図書館東京本館、

国会図書館関西館、国会図書館国際子ども図書館、大阪府立国際児童文学館、神奈川近代文学館、相模原市立津久井郷土資料室、東京都立図書館、日本近代文学館目黒、立川市中央図書館、北海道道立図書館、昭和館、三康文化研究所附属三康図書館そして各大学の図書館である。韓国においては国立中央図書館(국립중앙도서관)、国立子ども青少年図書館(국립어린이청소년도서관)、国立デジタル図書館(한국국립디지털도서관)、国会図書館(국회도서관)、韓国学中央研究院(한국학중앙연구원)、大韓民国歴史博物館(대한민국역사박물관)、韓国漫画博物館(한국만화박물관)で調査した。

北宏二の資料を多く持っている国会図書館東京本館、昭和館や韓国国立中央図書館では、調査に行く度、閲覧可能な所蔵資料が増えていた。寄贈書が続々と上がっている。例えば、韓国の英字新聞から戦前の彼の業績をたどろうと、『KOREA REPUBLIC』を韓国中央図書館で調査をした際、ほぼ見つけることができなかった。しかし、日本の図書館で保存していることがわかり、調査すると風刺漫画、三コマ、四コマ漫画・マンガが連日掲載されていたことがわかった。もちろん全部が保存されているわけではないことから、『KOREA REPUBLIC』を発行していた現『KOREA HERALD』に問い合わせると、「昨年、韓国中央図書館に寄贈した」との返答があった。再度、調査に行くと、彼が連載期間中の新聞が出ていた。日本でも同じようなことが何度かあった。

国会図書館本館、関西館、子ども図書館そして昭和館にある北宏二の作品は検索することができる。それを頼りに推測し、他の図書館や資料館に当てをつけ、調査をしていった。他の機関では、蔵書目録にあるカードや検索をかけても、挿絵家の名前まで出てくることはほぼなく、一つ一つ確認することとなった。名前は掲載されていないが、挿絵のサインから特定することもできた。名前やサインはないが、おそらく北宏二だろうと思われる作品もいくつかあったが、今回はそれを除いた。

また、北宏二に関する書籍やインタビューにおいて掲載された情報でも、現物や複製物が見つからないものも多かった。そこで本稿でのデータは、現段階で誰もがアクセスできる一次資料のある作品のみに限定をした。

紙芝居

北宏二は、日本での学生の頃より頭角を現している。北宏二について書かれ

ているプロフィールをみると、雑誌『日本少年』でデビューと書かれているが、実際には『日本少年』よりも早い時期の書籍『カナイソップ』が最初である⁽¹⁾。彼は、弟子時代、師匠の江島武夫の代わりに、また当時人気であった紙芝居を描いていた。

私は紙芝居の絵もかくようになったが、これは絵をかいて持っていきばすぐ金をくれたのでとても便利であったが、ストーリーを貰って一巻物をかくのに、二十余枚も色をつけてかくために時間がかかって閉口した。しかしすぐ現金になる魅力から、ついつい紙芝居の絵をかくことが多くなった⁽²⁾。

北宏二の弟子であった蘇在必氏にインタビューした際、紙芝居について話をしており、北が紙芝居を描いていたのは確かである。引用文からもわかるように少しではなく、いくつか描いているようだが、現調査段階では、北の描いた紙芝居は、見つかっていない。兄を追いかけて、弟の金義煥も日本へ絵の勉強へと来ている。弟のペンネームは芝義雄である。芝義雄名義の紙芝居は見つかっている。また芝義雄は、誤植かもしれないが、他にペンネームを持っていたのはと推測している。それは芝義雄の名前のある雑誌を探していると、たまにはあるが「芝義郎」「芝義朗」を見つかる。筆致が似ていることから、同一人物ではないかと推測している。そこで兄の北宏二も初期においては、他の名前を使用していたのではないかと推測している。現在のように著作権の概念が薄い時代であった。特に紙芝居は書籍とは流通経路が異なっていた。作者の名前を記すということが、現在ほど厳密ではなかった。そのため紙芝居を配給する側で、名前を変更していたとも考えられる。好事家たちが競って水木しげるの紙芝居を探していると聞くが、見つからないというのもそれが原因ではないだろうか。

北宏二雑誌掲載作品―戦前―

実業之日本社の『日本少年』

『日本少年』は一九〇六年、実業之日本社より創刊された雑誌である。当時の少年雑誌といえば博文館の『少年世界』や時事新報社の『少年』が人気であっ

た。そこを押しつけ『日本少年』は、明治から大正にかけて、売り上げが伸び、大正期には最も人気のある少年雑誌へと成長した。つまり、北はかなり早い段階で、当時の人気少年誌の挿絵を飾っていたことがわかる。

彼の活躍していた時期の『日本少年』は保存されているものがいくつかある。同時に子供雑誌であることから、破られているものや、落書きがあるものも多い。

私が挿画を初めてかいたのは、実業之日本社が出していた「日本少年」という雑誌であった。漫画家の那須良輔氏も私と同じ頃、「日本少年」からスタートした人で、当時「ノンキナ殿様」という連載物をかいていたが、雑誌社で顔を合わせるとよく青山の彼の下宿に遊びに行ったものだ。「日本少年」の編集長、二宮伊平氏は、私達の絵にケチをつけていつもかき直させるので那須君と私は不平だらけであったが、その一面人情の厚い人で、私達が困っている時はよく画料の前借りに応じてくれた⁽³⁾。

引用文や添付データからもわかるように、編集長の二宮伊平の詩や、文章などの挿絵掲載が多い。一九三六年一月号から始まった「少年行進曲」は一年以上にわたり連載され、そこに挿絵を描いている。北宏二にとり、二宮伊平との出会いは、挿絵家として大成する大きなチャンスとなったに違いない。後に、多く描くこととなる少年少女小説の挿絵は「少年行進曲」が嚆矢となっていく。

また『日本少年』は弟の芝義雄も多くの挿絵を描いている。芝は『日本少年』専属の挿絵家であった⁽⁴⁾。そのためか芝義雄は、実業之日本社から出版されている雑誌に掲載されているのが目立つ。同じ実業之日本社から刊行されていた『少女の友』では、北宏二の名前を見つかることができなかったが芝義雄の名前は容易に見つけられる。

『日本少年』は、付録もいくつかが保存されている。現在でも、マンガ雑誌の付録にA6サイズの別冊のマンガがつくことがある。その原型であるかのような読み物の付録である。そこには少年小説が掲載されており、その挿絵の乗物や武器物や軍記物などが描かれている。北宏二と芝義雄ともに、それらのペン画が得意であり、両名の名前を見つかることができた。付録については、本来どのくらいいついていたのか不明であるため推測しかないが、見つければ彼らの

名前を発見できるだろう。

北宏二雑誌掲載作品―戦前―

博文館の『新少年』と『譚海』

『新少年』については、雑誌がほぼ見つからない。『日本少年』を描くようになってから、北は次のように記している。

その後私は博文館の「新少年」、講談社の「少年倶楽部」にも挿画をかきようになった⁽⁵⁾。

添付データからもわかるように彼は『日本少年』『少年倶楽部』での仕事が多い。それと列挙し『新少年』を記述している。『新少年』は一九三五年に博文館から創刊された雑誌である。同時期の『日本少年』『少年倶楽部』同様に北が挿画を描いていたことを鑑みると、少年の好む乗物、武器物、軍記物が多い雑誌であったと推測できる。そのため、北の挿絵掲載は多かつたと推測できる。出版社も博文館であることから、保存されている可能性がある。しかし、図書館や大学などを探してみると、全部で五冊も満たなかった。一九三七年十一月号の「鬼曹長悲憤の割腹」のみ見つかった。同じく軍人の割腹を描いた「壮烈鬼中尉の割腹」がある。それは一九三九年九月号『譚海』に掲載されている。

『譚海』も博文館から出版された雑誌で創刊は一九二〇年である。『譚海』も見つからない雑誌の一つである。しかし『新少年』よりも多く残っている。『譚海』は目次に挿絵家の名があまり書かれていない。読者の興味を惹く挿絵家であれば、名前は掲載されない。しかし、北宏二の名前は掲載されていることがある。そのため『譚海』にも多く描いていたと考えられる。

北宏二雑誌掲載作品―戦前―

文芸春秋の『モダン日本』と宝文界の『令女界』

『モダン日本』は、文芸春秋を興した菊池寛により一九三〇年に創刊された雑誌である。『文芸春秋』の編集者であり、朝鮮出身の馬海松が社長となる。馬海松についての北の記述がある。

私には「モダン日本」の挿絵は一度もかかしてくれなかったが、他の雑誌にはよく紹介してくれた。虎ノ門クラブのメンバーで、「令女界」の編集長北村寿夫氏にも紹介してくれて、「令女界」の口絵を何回かかいたことがあった⁽⁶⁾。

北は「一度もかかしてくれなかった」と記述しているが、『モダン日本』に挿絵を描いている。短編の読み物、懸賞小説の挿絵である。この引用文を見つめる前から『モダン日本』を調査していた。なぜなら二人は、現在韓国の登録文化財五三七号に指定されているマンガ「うさぎとさる」の作家と挿絵家の間柄であるからだ。そのためこの引用文を見つけたとき、北本人が忘れていたのか、依頼したのが馬海松ではないのかと躊躇った。「かかしてくれなかった」と後に記述していることから鑑みると、ほぼ『モダン日本』には描いていないのではと推測している。昭和館にある『モダン日本』はすべて調査したが、国会図書館のものはまだ調査ができていないのでこれも続行していく予定である。

『令女界』は一九二三年に宝文館から創刊された女学生向けの文芸雑誌である。当初は女学生向けであったが、北宏二の挿絵が掲載されたであろう一九三〇年代は対象年齢が上がり、女性の文芸雑誌となっていた。引用文の「何回かかいた」とあるようにそれほど多くはないと考えられる。昭和館にある『令女界』は調査をしたが、そこに見つけることはできなかった。国会図書館や大学図書館でも『令女界』は当該年がほぼ残っておらず、探すことは困難かもしれない。

北宏二雑誌掲載作品―戦前―

産業組合中央会の『家の光』

一九二五年、産業組合中央会によって創刊された雑誌である。現物は昭和館に数点あり、どのような雑誌であったのかわかる。復刻版として『家の光』『家の光都市版』は出版されており、比較的調査がしやすい。農村を対象とした雑誌であり、現在ではJAグループの文化事業や出版を請け負う会社へと引き継がれている。戦時期においては、他の雑誌と同様に戦時色が強い。復刻版が出ていることから、北宏二が活躍した時代に当てをつけ一九三三年から一九四五年まで調査した。この雑誌も目次に挿絵家の名前が掲載されておらず、また挿絵家の署名が記入されていないことも多い。

最初に見つけたのは一九三七年十一月号である。タイトルは「無敵皇軍の奮闘絵巻」であった。このタイトルは十二月にも引き継がれており、連作である。調査したなかではこの作品のみ、弟の芝義雄との合作と署名がある。『日本少年』では隣り合ったページで作品を描いていることはあったが、それはともに独立した作品であり、署名も別々である。二人は画家であり、同じ雑誌で描いていることから特に若い時期は協力して作業をしていたのだろう。「無敵皇軍の奮闘絵巻」はペン画に文章が添えられている作品である。つまり文章よりもペン画の挿絵を中心とした誌面となっている。

十一月号には「戦史に輝く山岳戦」「勇壮極まる敵前渡河」「仙人斬り部隊」「決死挺身隊の人梯子」「渡河班勇士人柱の橋」「敵軍の重囲中に大行李死守」「武人の心意気」「南京大空襲」と八ページ渡るペン画となっている。戦記物のペン画を得意としたこの兄弟にとり、今後の見本となるようなペン画である。

北宏二雑誌掲載作品 ― 戦前 ―

小学館の雑誌

小学館の雑誌で見つけたのは『小学五年生』『小学六年生』『国民五年生』『国民六年生』『少國民の友』である。小学館は一九二二年八月に創業した会社である。創業の際、『小学五年生』『小学六年生』は創刊された。一九四〇年に両誌は、『国民五年生』『国民六年生』と改題されるが、戦後また名前を戻している。これら学年誌は、子どもの数が増えた戦後から昭和まで隆盛を極めたが、戦前においては博文館、実業之日本社、大日本雄弁会講談社をしのぐほどの雑誌ではなかった。『少國民の友』は一九四二年に創刊された高学年向けの雑誌である。国会図書館、昭和館で保存されている一九三三年から一九四五年までを調査した。小学館の雑誌も保存されている数が少なく、調査が難しい。北宏二が日本に戻ってからの書籍をみると小学館は見つからなかった。そのため、それほど小学館との仕事は、多くはないのではと推測している。

北宏二雑誌掲載作品 ― 戦前 ―

大日本雄弁会講談社の『少年倶楽部』

少年雑誌の隆盛は、明治時代は博文館の『少年世界』、大正時代は実業之日本社の『日本少年』、昭和になり大日本雄弁会講談社の『少年倶楽部』へと移って

いった。

彼の活躍した時代の『少年倶楽部』は国会図書館と昭和館を合わせれば、すべてが保存されている。他の雑誌で歯抜けなく、調査ができるものはなかった。そのため『少年倶楽部』の掲載から、彼の活躍を推測し、他の雑誌を調査することに役立った。添付データを見てわかるように、彼の主戦場は戦前では大日本雄弁会講談社であり、戦後は講談社である。つまり日本における主な活躍は、講談社を中心と考えて間違いないだろう。戦前、百万部以上の発行をした同雑誌社の『キング』でも彼の作品を見つけることができた。『キング』だけでなく、『富士』にも挿絵の掲載があると推測している。北の得意とする挿絵は少年誌向きのため、一般誌の本格的な調査はまだであるため、続行していきたい。彼の活躍は初期においては実業之日本社の『日本少年』であり、名前を売りに出す隆盛期をつくりだしたのは『少年倶楽部』である。戦前において『キング』は百万部以上、『少年倶楽部』は八十万部以上の発行部数をたたき出している。それゆえ『少年倶楽部』は彼の故郷、朝鮮でも読まれていたことから、彼が朝鮮に戻ってからの活躍に大きな貢献をもたらしている。

彼の挿絵が登場したのは一九三八年六月である。『少年倶楽部』に首座を奪われ、同年十月号に廃刊となった『日本少年』からの移動だろう。『少年倶楽部』では一年以上にわたる連載の挿絵をしていたことから、掲載量の多さとなっている。戦前は一九四五年二月号まで掲載されている。そのうち、大日本雄弁会講談社からの要請で朝鮮へと戻っている。

『少年倶楽部』から『少年クラブ』へと雑誌名が変更された戦後においても、約十五年のブランクを経て、また掲載されることとなる。一九五九年に日本へ戻ってからの仕事であるため、戦後においても講談社とのつながりが深いことがわかる。

北宏二雑誌掲載作品 ― 戦前 ―

大日本雄弁会講談社の『少女倶楽部』

一九二三年一月、少女向けの雑誌として『少女倶楽部』は創刊された。当時博文館の『少女世界』、実業之日本社の『少女の友』がライバル雑誌として控えていた。『少女の友』は当時十数万部の発行部数であり、同年の新年号『少年倶楽部』が七万四千部の実売であった。『少女倶楽部』の創刊号は六万七千部が

売れたことからまずまずの成功であった⁽⁷⁾。

『少女倶楽部』は国会図書館の所蔵が少なく、昭和館、大学図書館、立川市中央図書館など、少ない所蔵からの調査となっている。

北宏二の作品を最初に見つけたのが一九四〇年一月号の「母の宝玉」からである。一年に渡る連載であった。作者は池田宣政である。第二十代アメリカ大統領のジェームズ・ガーフィールドの母の献身的な愛の話である。データに金龍煥書籍掲載作品の戦後のなかに『ガーフィールド』がある。この書籍はおそらく戦前に初版が発行されたのだろう。『少年倶楽部』や『少女倶楽部』の読み物は戦前において非常に人気があり、書籍化されたものも多い。しかし、子供向け書籍は保存している機関があまりなく、見つからないのが実情である。戦後においても子供向けの書籍の調査は難しいと感じた。寄贈本がこののち増えてくることを期待している。

北宏二雑誌掲載作品―戦前―

大日本雄弁会講談社の『幼年倶楽部』

一九二六年に『幼年倶楽部』は創刊された。『少年倶楽部』『少女倶楽部』の読者よりも若い読者を想定している。『幼年倶楽部』から『少年倶楽部』『少女倶楽部』へと継続購読するようなつくりとなっている。北宏二の名前を最初に発見したのは一九三九年一〇月号からであった。『幼年倶楽部』は国会図書館、昭和館で所蔵されているが、数が少ない。そのためこれより前に掲載されていた可能性はある。添付データを見ると『少年倶楽部』での業績をかわれての掲載であるだろう。

『幼年倶楽部』は対象年齢が低いことから、『少年倶楽部』と比べ漢字が少なく、行間も広い。内容も少し幼い。挿絵や漫画も幼いものも多い。しかし、北宏二の挿絵は『少年倶楽部』と変わることとはなく、勇ましい挿絵である。軍記物、戦記物、動物などの彼の得意なペン画が挿絵に掲載されている。

北宏二雑誌掲載作品―戦前―

錬成の友社の『錬成の友』

一九四四年一月、『錬成の友』は朝鮮総督府監修のもとで創刊された日本語を知らない朝鮮の成人男性を読者対象とした雑誌である。『少年倶楽部』より日本

語のやさしい『幼年倶楽部』に作りが似ていると感じた。一九四三年、朝鮮に徴兵令がしかれ、日本の国情や言葉を教えるため、各地に錬成所ができた。そこでの副読本をつくってほしいとの要請が大日本雄弁会講談社にきた。創刊の際、北宏二と釜山出身の詩人の金素雲⁽⁸⁾が講談社に招かれ、総編集局長の加藤謙一⁽⁹⁾から意見を求められた。創刊号の表紙は北宏二が描いている。また創刊号からの連載マンガは朝鮮名である金龍煥を使用している。『錬成の友』は彼の運命を変えることとなった。

この雑誌はソウルで作成した編集プランが、総督府情報課によって承認されると、講談社内にある錬成之友東京編集部に送られ、日本の現役作家に執筆を依頼し、印刷までして再びソウルに送るという方式でやっていたが、頻繁になると輸送が困難になりソウルで原稿依頼から印刷まで一貫作業をすることに決定し、私に錬成之友社囑託としてソウルに行ってくれということであった⁽¹⁰⁾。

一九四五年三月の東京大空襲の後、彼はソウルに赴任するよう要請された。赴任手当として四千円が渡された。

最初に『錬成の友』を発見したのは韓国であった。しかし、それは実物ではなくコピーしたものを写真で撮ったものであった。見せてくれた方に質問してみると、おそらくどこかにはあるだろうが、その方も現物は見たことがないと話していた。韓国でも調査したが見つからなかった。諦めていたときに日本で、創刊号の一九四四年一月号から一九四五年三月号まで見つかった。

一九四五年三月の東京大空襲により、多くの出版社や印刷所が焼けてしまい、雑誌の休刊、廃刊があいついでいる。北宏二がソウル駅に一九四五年七月十五日に到着している⁽¹¹⁾。また終戦の八月十五日にはソウルにある錬成之友社に出社している⁽¹²⁾。ゆえに一九四五年三月号以降も『錬成の友』は続いていたと考えられる。

北宏二雑誌掲載作品―戦前―

大日本雄弁会講談社の『若櫻』

一九四四年五月、陸軍省後援の『若櫻』が創刊される。『錬成の友』同様に創

刊号から北の挿絵が掲載されている。『若櫻』が創刊された同月『海軍』も創刊されている。『海軍』は名前のとおり、海軍省後援である。『若櫻』は四冊見つけ、そのすべての雑誌で掲載があったことがわかった。『海軍』は雑誌自体をまだ見つけていない。両雑誌ともに、少年兵募集に重きを置いており、軍記物、戦記物の得意な北宏二の挿絵は掲載されている可能性は高い。

一九四一年十二月に起きた真珠湾攻撃以来、子どもたちを読者と想定した雑誌の多くは戦意高揚ものが多くなる。終戦の一九四五年に向かい、少年少女雑誌だけでなく一般誌も淘汰され、雑誌の種類が徐々に少なくなっていく。当時は検閲も厳しくなり、一般生活を扱ったものでさえ、戦時物に差し換えられていた。また雑誌社に検閲を行っていた内務省の役人が出向している場合もあった。そのような時代に創刊していることから、戦意高揚を主とした内容となっている。

朝鮮における北宏二（金龍煥）新聞・雑誌掲載作品―戦前―

北宏二にとり戦前の活躍の場はほぼ日本であることから、朝鮮での出版はない。雑誌『新東亜』『少年』は韓国で見つけたものだが、新聞『少年朝鮮日報』『毎日新報』は日本で見つけた。ハンゲルで書かれている雑誌、新聞であることから、朝鮮で制作したと推測している。北宏二自身が朝鮮に戻って描いたとも考えられるが、その可能性は薄い。日本からの輸送、あるいは誰かが持っていったと考えるのが妥当である。

『新東亜』は一九三六年五月号の前後を調査したが掲載はなかったため、一時帰国したときに描いたとも考えられる。『少年』は保存状態が悪く、読めないものもあった。さらに保存されている冊数が少ない。『少年朝鮮日報』で連載したことを鑑みると、同じ出版社である朝鮮日報社からの『少年』にはもう少し描いていると考えられる。

『毎日新報』で連載された小説は、日本の『毎日新聞』からの二次掲載である。これは小説部分をハンゲルに翻訳してあり、北の描いた挿絵は変更されていない。著者の張赫宙、挿絵の北宏二は『毎日新聞』と同じく漢字で描かれている。日本の雑誌での活躍からみると、戦前における北は、あまり朝鮮の雑誌や新聞の仕事はしていないと推測できる。

北宏二（金龍煥）書籍掲載作品―戦前戦後―

北宏二という名前が雑誌『日本少年』よりも前に、記された書籍が師匠の江島武夫との挿絵共作『カナイソップ』である⁽¹³⁾。その後、見つけた書籍は大本雄弁会講談社から発行されている『小公子』であった。世界名作全集と名を打たれたこの書籍は日本や外国のさまざまな有名な小説や偉人などを取り上げている。これも調査をしたのだが、ほぼ戦後のものばかりで戦前のものがあまり見つからなかった。北宏二が朝鮮に戻っていた一九四六年から一九五九年に出版されているものは、再販のものであると考えられる。つまり戦前に初版本が出版され、戦後再販を繰り返されたのである。少なくとも、戦前には『ガールズワールド』と『紅はこべ』は書籍化されていただろう。そのように考えると、書籍化されたものはまだまだ見つかるのではないかと思う。

戦後、日本に戻ってからは戦前から仕事をしてきた講談社を除けば、ほぼ名前を金龍煥としている。一九七〇年を過ぎると、古巣の講談社から出版された『シャーロックホームズ』のシリーズでも金龍煥となる。また、文章を書く作家としても書籍を出版している。朝鮮の英雄、李舜臣を主人公とした『亀甲船海戦記―海の覇者 李舜臣將軍』は、金龍煥自身が書いた小説である。一九七七年四月から十月にかけて雑誌『軍事研究』で連載された小説をまとめたものである。この小説にはほぼ挿絵が入っておらず、彼の絵に関する見所は、カラー表紙のみとなっている。『絵で見る韓国の歴史』シリーズは、韓国でも出版されている。この頃、彼は日本からアメリカへと移住してしまい、そこで没した。現調査では、彼の仕事の最後となっている。

北宏二雑誌掲載作品―戦後―

日本に戻ってきた経緯は、当時東京にあった駐日アメリカ軍の「極東軍司令部」からの依頼であった。新聞『동아일보（東亜日報）』、英字新聞『KOREA REPUBLIC』、雑誌『학원（学園）』、『아리랑（アリラン）』などに多くの連載を抱えていた時期である。アメリカが韓国に民主主義を啓蒙しようとした雑誌『자유의 벗（自由の友）』の仕事であった。読者は韓国民を対象としていたが、韓国には物資が乏しく、印刷を日本でしていた。給料の提示は十倍で、家と車も提供するという条件であった。『自由の友』では、漫画家や挿絵家の署名が打たれておらず、彼の筆致を頼りにしない限り、作品を特定できない。韓国でいろいろ

な人々に話を聞いた際、多くの人が挿絵の仕事だけで、日本に戻っていないと口をそろえていた。

彼は戦前の日本において、かなりの額を稼いでいたようで、朝鮮に戻ってからは立地の良い場所に、当時は珍しかった二階建ての一軒家に住み、隣には弟の金義煥も一軒家に住んでいたという記事を読んだことがあった。また、彼が朝鮮に戻ってくる経緯についても、講談社から別金として赴任手当をもらっている。それは『錬成の友』全般を任せるということであつたと推測できる。なぜなら、戦後の朝鮮において彼は挿絵家・マンガ家だけでなく出版社を立ち上げていたからだ。おそらく『錬成の友』同様に『自由の友』を任されたのではないかと考えている。その隙間で、日本の雑誌に描いていたのだろう。

一九五二年八月夏季増刊号『面白倶楽部』に掲載された漫画作品は、彼がまだ韓国にいたころである。どのような経緯で日本に持ち込めたかは不明である。誰かに託したとも考えられるが、アメリカへ行く際に日本経由で本人が描いたものではないかと考えている。当時、韓国と日本は国交が結ばれておらず、公には来日することができなかった。しかし、彼は朝鮮・韓国において英字新聞で風刺漫画、三・四コマ、マンガを連載していた。さらに米軍の依頼で日本に戻ってきたことを考えると、飛行機にて米軍経由で立ち寄ったとも考えられる。出版社の光文社は彼の古巣、講談社系の会社である。

日本に戻ってからは、講談社でまた挿絵を描いている。『ぼくら』は多くが保存されておらず、国会図書館、昭和館にあったもの調査した限りである。『週刊少年マガジン』はまだこの時期、読み物のほうが圧倒的に多かった。そのため、目次や検索に挿絵家の名前は記載されていない。

『少年クラブ』では、廃刊となつた一九六二年十二月号の最期のページを北宏二のペン画が飾っている。調査をした限りであるが、「北宏二」の名前はこれを最後に消えてしまう。この後、金龍煥となり、自分のエッセイに挿絵を描くというスタイルが多くなる。

今回データには反映していない大量の金龍煥名義のものがある。韓国系の新聞『統一日報』である。現在、一九七三年十二月から一九九〇年まで調査している。この間、すべてを金龍煥が時事漫画、四コママンガを担当したわけではない。しかし、一九七〇年代はほぼすべてを担当している。新聞であるため、休刊日を抜き、毎日である。多い時には時事漫画、四コママンガ、連載小説の

挿絵を描いている。時には、エッセイ漫画を描いていることもある。また、名前は書かれていないが、明らかに金龍煥によって描かれた挿絵もある。一九七〇年代、八〇年代の仕事の多くは『統一日報』であつた。

まとめ

今回は日本で出版された北宏二の挿絵、漫画・マンガ等を中心に調査した結果とデータを報告した。日本統治下の朝鮮で発行された雑誌、新聞も入れた。失われてしまった資料も多く、彼の作品を完全にデータ化することは不可能である。そこで、現時点においてどこかで保存されており、アクセスのできる資料とした。

実際、彼の作品を量だけみると、韓国で調査したときのほうが、圧倒的に資料が多い。金龍煥は、日本からの解放後すぐに『중앙신문(中央新聞)』にて風刺漫画、四コマ漫画を連載している。朝鮮・韓国での活躍はほぼ十五年でしかないが、現時点の調査でさえ、本稿の日本での出版記録データの五倍以上ある。日本での活躍はペン画が多く、時間が費やされる作品が多いのに対し、韓国での活躍は一筆描きのような風刺漫画が多い。それは当時の韓国における物質の乏しさが原因である。

韓国での現物資料は明らかに日本の資料と比べてみると劣化が激しかった。朝鮮戦争中でさえ、『서울신문(ソウル新聞)』や書籍も発行している。朝鮮戦争が終わってすぐ創刊された新聞『KOREAN REPUBLIC』では、日本に戻ってくるまでの一九五三年から一九五九年、ほぼ毎日、彼の風刺画と漫画・マンガが掲載されている。

日本からの解放後の朝鮮に居たこと、日本ですでに著名であつたこと、出版の系統的知識などに熟知していたことは、朝鮮・韓国の出版文化の発展に、彼の挿絵や漫画の力は大きく貢献したに違いない。彼だけでなく、多くは戦前、朝鮮から海外へと留学した者たちにより、出版社などが立ち上がっていた。

解放後の朝鮮、朝鮮戦争後の韓国では出版ラッシュが相次ぎ、そこに挿絵や漫画を描ける人物は少なかった。そのためか新聞、雑誌の連載が多い。彼は、同じ雑誌のなかでいくつも作品を描いている。後にエッセイや小説を書いたように、絵だけでなく文章も多く書いていた。

二〇一七年の調査を始める前、二〇一四年度から三年間「戦時下の漫画に描

かれた戦地及び植民地の表象研究」のテーマにおいて科研費の助成を受け、戦前・戦中期における日本統治下の「漫画」「挿絵」を中心に調べていた。それゆえ北宏二の挿絵がどの雑誌に掲載されているか、ある程度目星をつけていた。本格的にはじめると思いもよらない雑誌に掲載されていることもあり、その雑誌を探す旅をしなければならず、資料探しには手間取っている。そして、戦前の多くの雑誌は残っていないことを痛感した。どの雑誌も散逸しており、ここに行けばこの雑誌はすべてみられるということとはなかった。調査をした際、寄贈したくとも保管する場所がないからとなく処分している話なども聞いた。

日本のどこかに一冊でもあればいいのだが、永遠に失われてしまった雑誌も多い。劣化も激しいことから、手元に置いておくことも難しくなる。どこに検索エンジンがあるかを定め、その場所でのみ検索できるといふスタイルも多い。せめて一本化された検索エンジンでもあればと願わずにはいられない。

二〇二〇年初頭からコロナ渦となり、韓国での資料収集が不可能となつていく。また日本においても、抽選での入館や休館、閉館になつていくことから、こちらも思い通りに収集できない。しかしながら、この期間が終わったときには少し資料が増えているだろう。日本で北宏二が活躍した少年少女雑誌は、所蔵していた方が高齢となり、図書館等に寄贈されることが多い。

北の作品は、朝鮮・韓国での仕事のほうが圧倒的に多い。しかし、彼の傑作の数々は戦前の少年少女誌のペン画である。特に博文館から出版された『譚海』と『新少年』は挿絵家としての出発となる初期作品となることから、雑誌が見つかることを願っている。

謝辞

本研究はJSPS科研費18K00151の助成を受けたものである。加えて、京都芸術大学二〇二〇年度特別制作研究費助成による研究成果の一部である。

「朝鮮」表記は朝鮮戦争休戦前を指し、「韓国」表記は朝鮮戦争休戦後を指す。「朝鮮・韓国」表記は朝鮮戦争をまたがっている時に使用した。また「漫画」は風刺漫画などの時事的作品を指し、「マンガ」はストーリーマンガを指すこととした。名前の「金龍煥」と「金竜煥」はどちらも多く使用されている。本稿ではデータもすべて「金龍煥」に統一した。

註

- (1) 牛田あや美「日本における金龍煥の発見」『京都造形芸術大学紀要 二十二号』京都造形芸術大学、二〇一八年。
- (2) 金龍煥「画筆五十年2」『統一日報』統一日報社、一九七九年四月二十一日。
- (3) 金龍煥「画筆五十年3」『統一日報』統一日報社、一九七九年四月二十四日。
- (4) 牛田あや美「越境する謎のマンガ家―戦中の北宏二と朝鮮動乱の金龍煥―」『京都芸術大学紀要 二十四号』京都芸術大学、二〇二〇年。
- (5) 金龍煥「画筆五十年3」『統一日報』統一日報社、一九七九年四月二十四日。
- (6) 金龍煥「画筆五十年5」『統一日報』統一日報社、一九七九年四月二十六日。
- (7) 講談社八十年史編集委員会『クロニク講談社の80年』講談社、一九九〇年。
- (8) 韓国釜山出身の詩人。朝鮮の文化を日本にもたらした人物でもある。
- (9) 『少年倶楽部』の編集長。戦後、大日本雄弁会講談社を去り、学童社を立ち上げた。彼の刊行した『漫画少年』から、手塚治虫をはじめ多くのマンガ家が巣立っていった。
- (10) 金龍煥「画筆五十年4」『統一日報』統一日報社、一九七九年四月二十五日。
- (11) 金龍煥「画筆五十年8」『統一日報』統一日報社、一九七九年五月一日印刷不鮮明。
- (12) 金龍煥「画筆五十年10」『統一日報』統一日報社、一九七九年五月一日印刷不鮮明。
- (13) 牛田あや美「日本における金龍煥の発見」『京都造形芸術大学紀要 二十二号』京都造形芸術大学、二〇一八年。

北宏二 雑誌掲載作品一戦前一

出版年	作品名	雑誌	出版社	備考
1934年11月	水車小屋	『日本少年』	実業之日本社	ペン画傑作集
1935年1月	上野公園西郷さんの銅像の前で	『日本少年』	実業之日本社	ペン画の東京
	喇叭			詩・有本芳水
	廟巷の十字火			文・村田義光
	白川大将と大王			文・二宮伊平
1935年2月	(奈良名所) 猿澤の池	『日本少年』	実業之日本社	ペン画の関西 詩・神山悠
	獅子王ナポレオン			文・有本芳水
1935年3月	箱根山	『日本少年』	実業之日本社	詩・二宮伊平
1935年4月	伊豆の大島	『日本少年』	実業之日本社	ペン画の東日本 詩・神山悠
1935年6月	尾道港	『日本少年』	実業之日本社	ペン画の山陽 詩・ほうすい
	飛行機と紙芝居			文・林二九太
1935年7月	伯耆の大山	『日本少年』	実業之日本社	山陰ペン画集 詩・神山悠
	飛行機と紙芝居			文・林二九太
1935年7月	家庭漫画	『婦人と修養』	婦女界社	文・北宏二
1935年7月	仲濱萬次郎	付録『日本少年』	実業之日本社	文・花田音次郎
	十吉漂流談			文・村田義光
1935年8月	アイヌの魚とり	『日本少年』	実業之日本社	北海道ペン画集
	飛行機と紙芝居			文・林二九太
1935年8月	無題(虎)	付録『日本少年』	実業之日本社	猛獣小説集
	生命からがら猛獣に追はれて			文・清水暉吉
1935年10月	枯れすすき	『モダン日本』	文芸春秋	文・如月敏
1935年10月	獅子王ナポレオン	『日本少年』	実業之日本社	文・有本芳水
	飛行機と紙芝居			文・林二九太
1935年11月	強盗と宣傳	『モダン日本』	文芸春秋	文・飯島昇
1935年11月	獅子王ナポレオン	『日本少年』	実業之日本社	文・有本芳水
1935年12月	Xマスの想ひ出	『モダン日本』	文芸春秋	文・清水俊二
1936年1月	煙幕	『日本少年』	実業之日本社	
	召集令			文・岡村俊一
	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年2月	昇天十分前	『モダン日本』	文芸春秋	文・黒樹扇子
1936年2月	頭山満先生	『日本少年』	実業之日本社	文・夢野久作
	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年3月	頭山満先生	『日本少年』	実業之日本社	文・夢野久作
	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年3月	海上を飛べる九四式水上偵察機	付録『日本少年』	実業之日本社	少年航空画報
	空中射撃演習的			少年航空画報
	箱根十國峠の航空灯台			少年航空画報
1936年4月	頭山満先生	『日本少年』	実業之日本社	文・夢野久作
	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年5月	少年行進曲	『日本少年』	実業之日本社	文・二宮伊平
1936年6月	登山スキータンク	『日本少年』	実業之日本社	最新乗物画報
	藪の人(ブッシュメン)			文・浮田良介
1936年6月	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年6月	天晴れGメン	付録『日本少年』	実業之日本社	冒険探偵名作集 文・神風隼人(原作 K・M・スカロン)
1936年7月	先手奥様	『モダン日本』	文芸春秋	文・田崎健治
1936年7月	海底遊覧タンク	『日本少年』	実業之日本社	海底探検画報
	海の狼との闘い			海底探検画報
	謎の黒獅子の像			文・鎌倉三郎
	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年8月	キャンプの朝	『日本少年』	実業之日本社	詩・有本芳水
	無題(黒豹と蛇)			猛獣大画報
	無題(鱈との闘い)			猛獣大画報
	謎の黒獅子の像			文・鎌倉三郎
1936年9月	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年9月	魚とり	『日本少年』	実業之日本社	詩・有本芳水
	ぞつとする瞬間!			アツという瞬間
	物凄く巻きこむ大渦			アツという瞬間
	謎の黒獅子の像			文・鎌倉三郎
1936年10月	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年10月	秋の海辺	『日本少年』	実業之日本社	詩・有本芳水
	一千万年前の海の動物			原始時代画報
	獐猛な剣龍の襲撃			原始時代画報
	マラソン王孫選手			詩・有本芳水
1936年11月	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年11月	空には戦闘機・海には軍艦	『日本少年』	実業之日本社	
	素晴らしい空中ホテル			百年後はどうなるか
	テレビジョン時代			百年後はどうなるか
1936年12月	少年行進曲			文・二宮伊平
1936年12月	爆弾時計	『日本少年』	実業之日本社	文・河野寧
	少年行進曲			文・二宮伊平

	片脚百萬圓			文・白須賀六郎
1937年1月	気象変換装置	『日本少年』	実業之日本社	
	動く要塞			
	少年行進曲			文・二宮伊平
1937年2月	世界一の大きな象	『日本少年』	実業之日本社	世界一番づくし画報
	世界一の長い橋			世界一番づくし画報
	少年行進曲			文・二宮伊平
1937年3月	少年行進曲	『日本少年』	実業之日本社	文・二宮伊平
1937年4月	俵藤太の大百足退治	『日本少年』	実業之日本社	豪傑の猛獣退治
	“友愛”の歌			文・岡村俊一郎
1937年5月	バルチック艦隊単独襲撃	『日本少年』	実業之日本社	文・鈴木氏亨
1937年6月	カムフラージュと楠正成	『日本少年』	実業之日本社	これは忍術か兵法か
	八幡太郎義家雁の乱れを見る			これは忍術か兵法か
	大開鏡岩			文・野口青村
1937年11月	無敵皇軍の奮闘絵巻	『家の光』	産業組合中央会	芝義雄との共作
1937年11月	鬼曹長悲憤の割腹	『新少年』	博文館	
1937年12月	無敵皇軍の奮闘絵巻	『家の光』	産業組合中央会	芝義雄との共作
1937年12月	支那戦線二千五百キロ	付録『日本少年』	実業之日本社	文・志摩達夫
1938年2月	温かい心の値打	『家の光』	産業組合中央会	文・長田千歳
	沈勇蒼の荒鷲		産業組合中央会	文・大林清
1938年2月	温かい心の値打	『家の光都市版』	産業組合中央会	文・長田千歳
	沈勇蒼の荒鷲		産業組合中央会	文・大林清
1938年2月	興安嶺の犬	『日本少年』	実業之日本社	文・岡村俊一郎
1938年3月	明るく伸びよ	『日本少年』	実業之日本社	文・岡村俊一郎
1938年6月	山路を行く、石黒遠山部隊	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	戦線ペン画集
	忠馬よ、安らかに眠れ			戦線ペン画集
	花園湖上の大決戦			戦線ペン画集
	皇軍のなさけにむせぶ老百姓			戦線ペン画集
	駱駝隊の威力			戦線ペン画集
1938年8月	育つ負けじ魂	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・豊澤豊雄
1938年11月	突撃する一等兵	『家の光』	産業組合中央会	文・福岡内午
1938年11月	突撃する一等兵	『家の光都市版』	産業組合中央会	文・福岡内午
1938年12月	青少年義勇軍の生活	『家の光都市版』	産業組合中央会	文・加藤武雄
1938年12月	燈火管制の夜の怪事件	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・小山勝清
1939年1月	凱歌の陰に	『小学五年生』	小学館	文・横手龍夫
1939年1月	嵐の郵便列車	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・河合三郎
1939年1月	新春	『婦女界』	婦女界出版社	文・別所夏子
1939年1月	支那物産地図	『譚海』	博文館	
	闘う戦車			
	大和魂・冒険探検座談会			筆記・藤原山彦
1939年2月	大昔の船	『小学六年生』	小学館	
1939年3月	涙の馬鈴薯	『家の光』	産業組合中央会	文・塚原健二
1939年3月	涙の馬鈴薯	『家の光都市版』	産業組合中央会	文・塚原健二
1939年4月	流弾	『婦女界』	婦女界出版社	文・佐々木栄子
1939年5月	濁流を愛馬とともに	『家の光都市版』	産業組合中央会	文・陸軍省兵務局馬政課
1939年5月	電波の仇討	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・河合三郎
1939年6月	雨の決死行	『家の光都市版』	産業組合中央会	文・梅村重義
	山砲を護る魂			文・藤井實
	戦場で聞いた思い出の歌			文・岡村記者
	国際子供ニュース			
1939年7月	祖国の空にささぐ	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・松井博
1939年8月	お土産をもってきた飛行機	『家の光』	産業組合中央会	文・天野雄彦
1939年8月	お土産をもってきた飛行機	『家の光都市版』	産業組合中央会	文・天野雄彦
1939年8月	荒唐に恥じず	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・赤川武助
1939年8月	見える聞える早慶戦	『譚海』	博文館	
	孤島の十一人			文・海原浩
	忠犬死を賭して			
1939年9月	壮烈鬼中尉の割腹	『譚海』	博文館	
	海底			
	大陸警備兵			文・伊藤松雄
	消える怪艇			文・志摩達夫
	ああ満蒙国境戦の鬼神			文・赤川武助
1939年10月	あっぱれ日本だましい	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・宮脇紀雄
1939年11月	これからの戦争にはどんな恐るべき兵器が現れるか	『小学生の科学』	誠文堂新光社	文・山本巖
	ヅム坊とおほ公			文・内山賢次
1939年11月	日本のこころ	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・我妻大陸
1939年11月	川をわたるとなかい	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・古賀忠道
1939年12月	大空の勇士	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・清閑寺健
1939年12月	十三人の付属兵	『婦女界』	婦女界社	文・阿部徹夫
1940年1月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年1月	幽霊花火	『譚海』	博文館	文・横溝正史
1940年2月	花咲く頃 (第二回)	『家の光』	産業組合中央会	文・東猛
1940年2月	ヤン少年の冒険	『小学生の科学』	誠文堂新光社	文・内山賢次
1940年2月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年3月	花咲く頃 (第三回)	『家の光』	産業組合中央会	文・宮野九十郎
1940年3月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年4月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年5月	花咲く頃 (第五回)	『家の光』	産業組合中央会	文・北本勝
1940年5月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政

1940年5月	艦長は死ねども	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・星光一郎
1940年6月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年6月	恐怖の一夜	『譚海』	博文館	本文『殺人少女歌劇』口絵
1940年7月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年7月	白鳩號の仲間	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・河合三郎
1940年8月	花咲く頃 (第八回)	『家の光』	産業組合中央会	文・大塚武雄
1940年8月	ガリバー旅行記 小人國の巻Ⅱ	『小学生の科学』	誠文堂新光社	文・北澤代二
	磁気地雷			新兵器ペン画集
	大戦車と火焰戦車			新兵器ペン画集
	長距離列車砲			新兵器ペン画集
	睡眠爆弾			新兵器ペン画集
	無線戦車			新兵器ペン画集
	パラシュート部隊			新兵器ペン画集
	要塞破壊砲			新兵器ペン画集
	快速戦車			新兵器ペン画集
	子持爆弾			新兵器ペン画集
	快速艇			新兵器ペン画集
1940年8月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年8月	つよい日本ぐん	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1940年9月	花咲く頃 (第九回)	『家の光』	産業組合中央会	文・玉田甚夫
1940年9月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年10月	花咲く頃 (第十回)	『家の光』	産業組合中央会	文・田代勲
1940年10月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年10月	雨ふりしぶく鐵かぶと	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
	新寶島		大日本雄弁会講談社	文・江戸川乱歩
1940年11月	油さし少年	『国民六年生』	小学館	文・徳永直
1940年11月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年11月	平和のまもり	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
	この旗の下に!			文・江川坦平
1940年11月	ノニとマンニ	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・上澤謙二
1940年12月	故郷の便りはまだか	『家の光都市版』	産業組合中央会	文・齋木郁三
1940年12月	母の宝玉	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・池田宣政
1940年12月	ノニとマンニ	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・上澤謙二
1941年1月	軍旗進む	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・練田博
	物を動かす力			文・竹内時男
1941年2月	大陸建設譜	『機械化』	山海堂	文・三宅政則
1941年2月	海の乙女	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・江刺田映像
1941年2月	戦車隊の働き	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・藤田實彦
	父の墓			文・エス・ライフ
1941年2月	きちがいぞう	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・野村愛正
1941年3月	模型機のおくりもの	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1941年4月	ゆかしい心	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
	動物園の愉快な話・珍しい話			文・福田三郎
	勝利の笛			文・江川坦平
1941年4月	ドイツのかいぐんのかつやく	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1941年5月	明日の戦いにそなえて	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1941年5月	つよい日本軍	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大木雄二
1941年8月	軍用犬	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1941年9月	目次カット	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1941年9月	いさましいさんがくせん	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1941年9月	少年と犬	『国民五年生』	大日本雄弁会講談社	文・平岩米光 (不鮮明)
1941年10月	かんしんな龍少年	『講談社の絵本 空ノマモリ』	大日本雄弁会講談社	文・宮脇紀雄
1941年10月	飛行機の進んできた道	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・富塚清
	無人島に生きる十六人			文・須川邦彦
1941年11月	王精衛先生物語	『国民五年生』	小学館	文・岩崎栄
1941年11月	動物のたすけあい	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・石原純
	無人島に生きる十六人			文・須川邦彦
1941年12月	無人島に生きる十六人	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・須川邦彦
1942年1月	無題 (軍馬)	『講談社の絵本 軍馬ト軍犬』		
	無題 (軍犬 アジア號)			
	無題 (軍犬 アジア號)			
	いさましい軍用鳩のはたらき		大日本雄弁会講談社	文・明甌外次郎
1942年1月	船出	『国民五年生』	小学館	文・内山賢次
1942年1月	僕等は少年戦車兵	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・松坂直美
	僕等は少年航空兵			文・松坂直美
	無人島に生きる十六人			文・須川邦彦
1942年2月	太平洋	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	詩・鈴木正美
	無人島に生きる十六人			文・須川邦彦
1942年3月	地図と赤い花	『少女倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・小山勝清
1942年3月	無人島に生きる十六人	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・須川邦彦
1942年4月	無人島に生きる十六人	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・須川邦彦
1942年5月	無人島に生きる十六人	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・須川邦彦
1942年6月	パレンバン戦記	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・徳永悦太郎
	無人島に生きる十六人			文・須川邦彦
1942年7月	無人島に生きる十六人	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・須川邦彦
1942年8月	日本と船 (其の二)	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・須川邦彦
	歩兵前進			詩・吉田嘉七
	無人島に生きる十六人			文・須川邦彦
1942年8月	勇ましい大東亜戦争の話	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・清閑寺健

1942年9月	飛行機と早さ 無人島に生きる十六人	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・山崎好雄
1942年9月	陸軍ばくげきたい	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・須川邦彦
1942年10月	武勲かがやく戦車隊 無人島に生きる十六人	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1942年11月	渡渉点	『キング』	大日本雄弁会講談社	文・須川邦彦
1942年12月	わが潜水艦米航空母艦ワスプを撃沈す	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・石田政次
1942年12月	日本軍のやしゅうせん	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・山中峯太郎
1943年1月	北のまもり	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1943年2月	非売品	『キング』	大日本雄弁会講談社	文・阿根川清人
1943年2月	最上徳内	『青年』	大日本青少年団体部	文・和田政雄
1943年4月	マオリ族絶滅	『家の光』	産業組合中央会	
1943年5月	世界に誇る帝國軍艦と平賀博士	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・山川惣治
1943年5月	馬鞍山の日の丸	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1943年7月	敵潜水艦を沈めた運送船の話	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・山岡荘八
1943年8月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1943年8月	二十九人ノケンタイ	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1943年9月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1943年10月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1943年10月	タタカフ日本軍 ミツリンヲススムハウ兵タイ 重慶軍ヲウチヤブッテ	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1943年11月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1943年11月	すすむけっしたい	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大木雄二
1943年12月	砲をさきに マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1943年12月	ツヨイ日本陸軍	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1943年12月26日	翼のある大砲	『週刊少國民』	朝日新聞	文・那珂良二
1944年1月	ラッパ (表紙) ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年1月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1944年1月	神野部隊のテガラ	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1944年2月	ガンバリ面長サン けっしのでんれい	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義 文・高垣睦
1944年2月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1944年3月	クワエンハッシャキ テキジンヲ ヤキ ウチ ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年3月	少年飛行兵 少年戦車兵 少年兵技兵 海征く陸軍 マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・松永健哉 文・大林清
1944年3月	岫巖の日章旗	『少國民の友』	小学館	文・山田健三
1944年4月	メクラノグンバ	『錬成の友』	錬成の友社	文・赤川武助
1944年4月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1944年5月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年5月	撃ちくだけ敵の上陸作戦	『若櫻』	大日本雄弁会講談社	文・此木友之
1944年5月	皇軍インドに進撃す 機関兵 工作兵 主計兵 衛生兵 軍楽兵 マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1944年5月	敵艦見ゆ	『少國民の友』	小学館	文・伊波南哲
1944年6月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年6月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1944年7月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年7月	敵陣潜入三十五日	『若櫻』	大日本雄弁会講談社	文・東猛夫
1944年7月	マライの虎	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1944年8月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年8月	新兵器V1號	『若櫻』	大日本雄弁会講談社	文・小松昌夫
1944年8月	目次の絵	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1944年8月20日	海の尖兵 決死の監視艇	『週刊少國民』	朝日新聞社	文・木村莊十
1944年9月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年9月	必殺の團魂	『若櫻』	大日本雄弁会講談社	文・赤川武助
1944年10月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年10月	神兵の聲	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	文・大林清
1944年10月	弾丸を途切らすな	『婦人倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1944年11月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年11月	目次の絵 (魚雷発射)	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1944年12月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1944年12月	目次の絵	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1945年1月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1945年1月	うれしい協力 敵機の話	『家の光』	産業組合中央会	文・木村莊十 文・森正光
1945年2月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義
1945年2月	神武必勝 吹雪の中に	『少年倶楽部』	大日本雄弁会講談社	
1945年3月	ガンバリ面長サン	『錬成の友』	錬成の友社	金龍煥名義

北宏二 雑誌掲載作品一戦後一

出版年	作品名	雑誌	出版社	備考
1952年8月夏季増刊号	のんきな小父さん 健康法の巻	『面白倶楽部』	光文社	
1960年9月	韓国文化と日本文化を語る	『親和』	日韓親和会	鼎談・鄭飛石、金龍煥（金龍煥名義）
1961年12月	一騎うち	『少年クラブ』	講談社	ペン画傑作名場面
1962年1月	あくまのおどる島	『少年クラブ』	講談社	文・真樹日佐夫
1962年2月	夜光る山	『少年クラブ』	講談社	文・和巻耿介
1962/2/11日号	銀の怪物号	『週刊少年マガジン』	講談社	文・久米みのる
1962年3月	戦艦『大和』	『少年クラブ』	講談社	ペン画傑作選
	決闘 グランド＝キャニオン			文・赤木雄介
1962年3月	善意	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥
1962年4月	ロデオ	『少年クラブ』	講談社	ペン画傑作選
	暗黒街撃滅			文・久米みのる
1962年6月	死を予言する男	『少年クラブ』	講談社	文・真樹日佐夫
1962年7月	無題（帆船）	『少年クラブ』	講談社	ペン画傑作選
	地底の戦い			文・海渡英祐
1962年7月1日号	あらしのマン島レース	『週刊少年マガジン』	講談社	文・真樹日佐夫
1962年7月8日号	守りかたしゼロ戦隊	『週刊少年マガジン』	講談社	文・真樹日佐夫
1962年7月22日号	戦艦大和さいごの出撃	『週刊少年マガジン』	講談社	文・真樹日佐夫
1962年8月	揚子江のあらし	『少年クラブ』	講談社	文・海渡英祐
1962年9月	ビリ一拳銃をぬけ！	『ぼくら』	講談社	文・小田創三
1962年10月	敵陣近し	『少年クラブ』	講談社	北宏二ペン画傑作選
1962年11月	無題（鷲）	『少年クラブ』	講談社	北宏二ペン画傑作選
1962年12月	無題（ライオン）	『少年クラブ』	講談社	北宏二ペン画傑作選
1963年4月	かた耳の大ひょう	『ぼくら』	講談社	文・赤木雄介
1963年4月	帰国感想	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥（金龍煥名義）
1964年5月10日号	超人になった少年	『週刊少年マガジン』	講談社	文・福島正実
1964年9月	帰国所感	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥（金龍煥名義）
1966年5月	ベトナムを見る	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥（金龍煥名義）
1967年2月	日本人妻たち	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥 1967年3月12日『毎日新聞』に転載（金龍煥名義）
1967年6月	韓国の漫画	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥（金龍煥名義）
1970年10月	二世	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥（金龍煥名義）
1972年1月	アメリカ大陸 ドライブ横断記	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥（金龍煥名義）
1973年4月	『李舜臣提督』を書くについて	『親和』	日韓親和会	文・金龍煥（金龍煥名義）
1973年8月	日本人の行動と意識	『親和』	日韓親和会	文・鈴木信昭（金龍煥名義）
1977年3月	レイ13世護衛マスケット銃騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1977年4月	黒田長政	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
	李舜臣1			文・金龍煥
1977年5月	高句麗鎧馬武士	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
	李舜臣2			文・金龍煥
1977年6月	フランス甲騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
	李舜臣3			文・金龍煥
1977年7月	ジンギスカン時代の蒙古騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
	李舜臣4			文・金龍煥
1977年8月	コザック騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
	李舜臣5			文・金龍煥
1977年9月	日本陸軍騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
	李舜臣6			文・金龍煥
1977年10月	英国軽騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
	李舜臣7			文・金龍煥
1977年11月	韓李朝騎馬武士	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1977年12月	ローマ時代の戦車	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年1月	ベンガルの槍騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年2月	アメリカの騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年3月	ドイツの銅鎧甲騎兵	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年4月	イギリスの儀仗鼓馬隊	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年5月	成吉思汗	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年6月	ナポレオン	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年7月	豊臣秀吉	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年8月	関羽と曹操	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年9月	謙信と信玄	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年10月	ハンニバル	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年11月	源義経	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1978年12月	佐々木高綱	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1979年1月	アレキサンダー大王	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）
1979年2月	中世スペインの騎士	『軍事研究』	ジャパンミリタリー・レビュー	表紙（金龍煥名義）

北宏二 書籍作品－戦前－

出版年	書籍名	出版社	備考
1933年	『カナイツップ』	第一出版協会	監修・藤谷小波 著・小関八洲子 挿絵は江島武夫と共作
1940年	『小公子』	大日本雄弁会講談社	原作・パアネット 千葉省三
1941年	『ヒットラー』	借成社	著・池田宣政
1941年	『軍旗と共に』	借成社	著・池田宣政
1941年	『少年魂』	借成社	著・池田宣政
1941年	『小公子』	大日本雄弁会講談社	原作・パアネット 千葉省三
1942年	『輝く海軍』	博文館	著・加藤武雄
1942年	『輝く海軍魂』	都祥閣	著・富田常雄
1942年	『ダバオの父 太田恭三郎』	借成社	著・野村愛正
1942年	『南洋狩猟の旅』	大日本雄弁会講談社	著・吉村九一
1942年	『殉国の人 吉田松陰』	借成社	著・池田宣政
1943年	『国防科学 図解兵器』	柴山教育出版社	著・長野邦雄
1943年	『自然科学をめぐる』	文明社	著・柴山雄三郎
1943年	『密林の日章旗』	借成社	著・南洋一郎
1943年	『無人島に生きる十六人』	大日本雄弁会講談社	著・須川邦彦
1943年	『老船長の話』	借成社	著・小門和之助
1945年	『大南島』	日本報道社	著・滝田憲次

金龍煥 書籍作品－戦後－

1946年	『小公子』	大日本雄弁会講談社	原作・パアネット 千葉省三	(北宏二名義)
1948年	『ガーフィールド』	借成社	著・池田宣政	(北宏二名義)
1949年	『ガーフィールド』	借成社	著・池田宣政	(北宏二名義)
1950年	『小公子』	大日本雄弁会講談社	原作・パアネット 千葉省三	(北宏二名義)
1951年	『ガーフィールド』	借成社	著・池田宣政	(北宏二名義)
1952年	『紅はこべ』	大日本雄弁会講談社	原作・オルツイ 小山勝清	(北宏二名義)
1972年	『名探偵ホームズ名作選7』	講談社	著・ドイル,サー アーサー・コナン 訳・久米穰	「ボスコム谷の怪事件」
1973年	『わらいを売った少年』	講談社	著・クリュス,ジェームス 訳・植田敏郎	
1973年	『図解野球・実践入門』	講談社	著・佐々木信也 絵・金龍煥、境木康雄、篠田ひでお、齒崎俊二、竜水信太郎、ちばてつや	
1973年	『名探偵ホームズ名作選11』	講談社	著・ドイル,サー アーサー・コナン 訳・久米穰	「人形文字の秘密」
1974年	『名探偵ホームズ名作選9』	講談社	著・ドイル,サー アーサー・コナン 訳・久米元一	「銀星号事件」
1976年	『ソウルの春にさよならを』	講談社	著・韓丘庸	
1979年	『亀甲船海戦記－海の覇者 李舜臣將軍』	成甲書房	著・金龍煥	
1980年	『韓国の民話』	ブックセンターオブジャパン	著・田坂常和 監修・金龍煥	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第1巻 原子社会と朝鮮神話』	エムティ出版	監修、イラスト・金龍煥 監修、文章・藤寛宇 訳・金容権、玄子亨、姜求榮	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第2巻 三国時代』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第3巻 統一新羅・渤海』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第4巻 高麗1』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第5巻 高麗2』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第6巻 李朝1』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第7巻 李朝2』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第8巻 李朝3』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第9巻 抗日闘争と解放』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 第10巻 解放・朝鮮戦争、韓国の経済発展と民主化』	エムティ出版	同上	
1993年	『絵で見る韓国の歴史 別巻 写真・図説総合韓国通史』	エムティ出版	同上	

朝鮮における北宏二（金龍煥） 新聞・雑誌掲載作品一戦前一

出版年	作品名	新聞・雑誌名	区分	出版社	備考
1936年5月1日	座席	『新東亜』	雑誌	東亜日報社	(金龍煥名義)
1936年5月1日	春風	『新東亜』	雑誌	東亜日報社	(金龍煥名義)
1936年5月1日	美髮	『新東亜』	雑誌	東亜日報社	(金龍煥名義)
1938年3月	내버린 물건(捨てられたモノ)	『少年』	雑誌	朝鮮日報社	(金龍煥名義)
1938年6月	큰 소리(叫び声)	『少年』	雑誌	朝鮮日報社	(金龍煥名義)
1938年9月18日	뜯뜯이1(トルトリ1)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年9月25日	뜯뜯이2(トルトリ2)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年10月9日	뜯뜯이3(トルトリ3)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年10月16日	뜯뜯이4(トルトリ4)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年10月23日	뜯뜯이5(トルトリ5)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年10月30日	뜯뜯이6(トルトリ6)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年11月13日	뜯뜯이7(トルトリ7)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年11月20日	뜯뜯이8(トルトリ8)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年11月27日	뜯뜯이9(トルトリ9)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年12月11日	뜯뜯이10(トルトリ10)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年12月18日	뜯뜯이11(トルトリ11)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1938年12月25日	뜯뜯이12(トルトリ12)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1939年1月8日	뜯뜯이13(トルトリ13)	『少年朝鮮日報』	新聞	朝鮮日報社	朝鮮日報付録(金龍煥名義)
1943年9月7日	巡礼1	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年8月24日「岩本志願兵1」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月8日	巡礼2	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年8月25日「岩本志願兵2」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月9日	巡礼3	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年8月26日「岩本志願兵3」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月10日	巡礼4	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年8月27日「岩本志願兵4」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月11日	巡礼5	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年8月28日「岩本志願兵5」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月12日	巡礼6	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年8月29日「岩本志願兵6」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月13日	巡礼7	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年8月31日「岩本志願兵7」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月14日	巡礼8	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年9月1日「岩本志願兵8」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月15日	巡礼9	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年9月2日「岩本志願兵9」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月16日	巡礼10	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年9月3日「岩本志願兵10」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月17日	巡礼11	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年9月4日「岩本志願兵11」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月18日	巡礼12	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年9月5日「岩本志願兵12」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月19日	巡礼13	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年9月7日「岩本志願兵13」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月21日	巡礼14	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年9月8日「岩本志願兵14」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)
1943年9月22日	巡礼15	『毎日新報』	新聞	毎日新報社	文・張赫宙(日本では毎日新聞にて1943年9月9日「岩本志願兵15」という題名で掲載された小説の二次掲載。北宏二名義)